

した。また、更に昭和四十四年に氏子から休日である土・日曜日の執行の要望があり、現在の十月第三日曜日を神幸祭とし、その前日を秋季大祭に変更した。秋祭りも春祭り同様、供膳祭が執り行われる。

江戸時代の秋祭り神饌

御飯白米三斗並に洗米、稲穂、御神酒、甘酒、鏡餅、環餅、杵形餅、竹串団子、鯛、鯉、海老、昆布、若芽、海苔、水菜、大根、生姜、芋、牛蒡、蕈、蓮根、柿、蜜柑、梨、榎、栗、塩、水、熨斗、御絹紅白式巻



秋季大祭

神幸祭

神霊が本社から他所に渡御される事を御幸といい、その祭典を神幸祭という。神幸は、本社の神霊を神輿・鳳輦などに遷し、神職が供奉する中、氏子等が神、幟旗、神宝の類を捧持し、古例の服装、又は礼装に威儀を正して供奉する。行列には山車、屋台その他の飾り物が参加し、中世以降神幸祭は華やかになった。

当社の神幸祭は寛保元年(1741)に始まった。当時は、弁才天の丘上(御休所)へ神輿を担ぎ上げ、御休場を設けて御旅所祭を執り行つて還御となつていた。この御休所は厳島神社から続く巨岩で出来た小高い丘で、御旅所祭を行つたと思われる社殿の礎石が残っている。

明和二年(1765)龍神社が鎮座する龍神山(祇園山)に御旅所設置の検分が行われ、この年から龍神社への御神幸が始まった。寛文年間まで吉備津神社から奉幣使が参向した。その後、早島帯江戸川両旗本の代参があり神幸祭は厳粛に執り行われた。

この神幸行列は廃藩後に多少の変更があつたものの、烏帽子に白張を着装した男子が神輿二基を担ぎ、「ライサミ」の掛け声と共に神輿を上下に揺すり練り歩いた。

ダンジリは古式に則り前に向拝がついており、鼓の紋を染め抜いた祭着を着用した一〇人の引き手によつて神輿に続いた。楽は古楽で「サ



弁才天御休所



龍神社御旅所

ガリハ」と称する雅曲を奏する者と大笛二人、大太鼓一人、鐘一人、鼓六人で構成されていた。江戸時代四国の藩主が江戸城へ参勤する際は、下津井港から上陸し味野、熊坂、藤戸、天城を経て西田に入り早島を通過し、塚山を越えて庭瀬街道に出る道程となつていた。ある年、土佐藩主の一行が当社の神幸祭の行列に出会つたが、一行は神輿が当社へ還御するまで、通行を停止したと伝えられている。また、「早島の歴史」には当社の神幸祭が次のように記されている。御崎宮の祭りは旧暦八月二十〜二十一日で、寛保元年(1741)から二十一日に神幸が始まつた。「早島沿革」には「同年神輿庫、梁行二間、桁行二間創立」とある。神幸は御崎宮から塩津の御旅所まで行われる。恒例の行事としては早島最大の行事であつ

た。

安政四年(1857)戸川家家臣の今村良左衛門が江戸へ出立の際、連れて行く供人が神幸を見ないで行くのは心残りであろうと、神幸が済むまで延期している。

神幸には前もつて知行所の役人が町並みを見分し、家の軒桁の端が道に張り出しているところは取り除かせた。また神幸の妨げにならないようにみだりに戸外へ出ることを禁じた。

また、若者が賑わいに「通りもの」を出すことを許された。山車、踊り、仮装などであろう。長津村は六歌仙、片田(長津村分)は踊り、塩地村は三十三間堂、中帯江村、前潟村は「通りもの」を出した。「通りもの」が恒例であつたかどうかは定かではないが、安政六年(1859)には十地区の若者がだんじりなどを出し「賑わいのお供」をしている。

同年の片山庶祐「懐中手控」に、通る村々へ達した「神幸の節心得」が次のように記されている。

- 一、二階から見物禁止。座布団使用禁止。手すりへ毛氈を掛けるのはかまわない。
- 一、家の前を神幸が通り過ぎるまで、一人が出て道へ人が出ないように人留めすること。
- 一、通り道にあたる家がつくつていている用水の板橋は、一切人留めにする。もし人が通つたら以後橋を取り払わせる。



明治36年神幸祭(早島町教育委員会提供)

- 一、幟持ち、銚持ち、宰領、獅子口取りなどまで上下半股立ちで勤めること。
- 一、上下着流しは村役人のほかは禁止。
- 一、知行所の足軽の指図に従うこと。

最後の項には村役人から異論が出た。「これまで行列指図は引き受け村庄屋と御供庄屋で差配をしてきた。それに御供庄屋は当日帯刀が許されている。足軽の指図を受けることはない。」との事であつた。

そこで、知行所の役人は、「足軽は心得違いの者を制するために出すもので、行列指図などは先例の通り。」とした。しかし当日足軽が山車などの指図をし、久々原の組頭や山車を引いていた若者をなぐつて問題となつた。

吉備津彦命が温羅という鬼を退治したという伝説による推論で、古いものは天保年号の紙製の鬼面が残っている。しかし早島には江戸時代の史料がない。

尚、現在の神幸は毎年十月の第三日曜日に行われている。現在倉敷市茶屋町(江戸時代早島・帯江領)の秋祭りでは、鬼面を顔にかぶつた多くの人が出て「茶屋町の鬼」として有名である。吉備津彦命を祀る早島の御崎宮(鶴崎神社)の信仰から始まつたという説がある。

早島の佐藤悦太郎「ある老人の思い出の記」に明治の鬼の話を次のように記している。

秋の祭りが来て、町のあちこちに余興の鬼が出歩いてきた。学校からの帰り道、すこしこわかったが、またそれをからかうのが面白かった。だが、小さい生徒たちや女の子はこわがって町の家へ駆け込んで小さくなり、また、中には泣きだす子供もいた。鬼は大人ではあるが、面をかぶつて、高下駄をはいているから、思うように走れない。大人と子供の勝負で、ここが面白かった。しかし鬼は一匹ではないので油断はできな



小浜付近を通る神輿(明治36年)